

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00981

研究課題名（和文）日本中世の地域秩序および地域政治史の展開に関する研究 - 播磨国を中心に -

研究課題名（英文）Research on regional order and regional politics in medieval Japan-with Hrima as the theme

研究代表者

市澤 哲（ICHIKAWA, TETSU）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：30251862

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：播磨国をフィールドに、個別荘園を超えた地域的繋がりを、交通体系や所領配置などの空間的把握の視点と、地域社会を支えるアクターの動的把握の視点の両面から追究した。具体的には、明石郡平野荘と加東郡大部荘に乱入した「悪党」メンバーに重なりがあることに注目し、彼らの出身地や職能について分析した。その結果、彼らの多くは河川や幹線道路が通る内陸部出身で、中核メンバーはそれぞれ荘園所務に関わっていた可能性が高く、彼らが年貢輸送などの職務遂行の過程で、関係を形成した可能性を指摘した。さらに悪党消滅の背景として、所務の担い手が彼らから宿の有徳人などの商業従事者に変化していく事態が想定されるという仮説を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)14世紀地域史研究は個別荘園、或いは一国を分析の単位とすることが多かったが、本研究は、交通体系、所領配置、アクターの行動の分析から、その中間のレベルに位置する地域的なまとまりの様相を明らかにした。(2)14世紀の悪党事件の特徴である広域勢力の糾合の様態を具体的に検討し、地頭代の家人が媒介として働く事例を明らかにした。さらに地頭代が所務に携わっていることから、年貢輸送などの職務を通じて、糾合の素地が築かれたことを指摘し、悪党を日常的な荘園所務のあり方と関係づけて議論する方向性を提示した。(3)上記を踏まえ、荘園所務方式の変化と悪党事件の消滅を関連付ける、新たな議論の枠組みを提示した。

研究成果の概要（英文）：Take Harima-Kuni for example, this study revealed the circumstances of 14th century community, in terms of transportation system, location arrangement and actors activity. Specifically, analyzing how do people from a wide area connect in Akutou-incident. Results of examination of Hirano-syo and Ohbe-syo, it became clear core members of participants of Akutou were magistrate of Jito. That means they deepened the relationship through the execution of their duties involved in manor management called Syomu. And their bindings were nurtured at a transportation hub like a port. Monk of Todaiji feudal lord of Ohbe-syo got angry why the Jito hired Akutou as magistrate. But the opposite was true. Magistrate of Jito became Akutou. From this we can get a hypothesis. Changing in management method, magistrate were expelled from manor management and that would cause Akuto to disappear. This study could point out that 14th-century regional order underpinned by traffic and the functions of actors.

研究分野：日本中世史

キーワード：日本中世史 14世紀 荘園制 悪党 播磨国 地頭代

1. 研究開始当初の背景

鎌倉末期～南北朝期にあたる14世紀の在地社会に関する研究は、すでに分厚い蓄積を持っている。しかし、分析の単位という視点から研究史を顧みたととき、一つの問題が浮かび上がってくる。当該テーマに関する研究の多くは、史料を豊富に残す荘園を分析の中心にしたもの、或いは守護の一国支配を想定するとともに、守護支配の浸透を基本的なベクトルとし、国を分析の単位にしたものが多い。その結果、その中間に位置するレベルの地域のまとまりや秩序を支えるアクター達の行動を明らかにする議論が十分になされていない。

しかし、中世前期の地域社会研究においては、荘園や公領をこえて関係し合い、都鄙間交通の手段を共有し合うような「国内名士」といった概念が提唱されて久しい。また中世前期の内乱研究も、地域秩序の分析を前提に置くことが当然の前提となっている。

14世紀研究も中世前期の研究を参照しつつ、歴史的な連続性とこの時期固有の歴史状況に留意しつつ、中間的な地域秩序やそれを支える人々の繋がりを検討する必要があると考えられる。

2. 研究の目的

以上の研究史的背景に基づいて、本研究では14世紀における個別荘園を超えた地域秩序の様態を明らかにすることを目的とした。

そしてその目的を達成するための下位の目的として、現地で荘園経営を担う荘官層に注目し、彼らの荘園内の職務だけでなく、荘園を超えた地域秩序とどのように関わっているのかを明らかにすることを掲げた。

3. 研究の方法

まず、播磨国を研究のフィールドとして設定した。同国がこの時期の史料に恵まれていることに加えて、平家の勢力基盤であったこと、その反転として治承・寿永の内乱後に鎌倉幕府勢力の進出が見られたこと、さらに承久の乱により幕府勢力がいつそう浸透し、六波羅探題の管国として支配をうけたこと、一方で生産力豊かな荘園として京都、奈良の荘園領主もその支配の維持に努めたことなどの、重層的な歴史的特性を持っていることがその理由である。鎌倉後半期、14世紀の播磨国は朝廷、六波羅探題、幕府勢力、荘園領主、在地勢力が関係し合う、「新しい政治史的領域」として成立しているといえる。それ故に、対象となる歴史的現象を歴史重層的、多元的に分析できることが可能であると考えられる。

この「新しい政治史的領域」という言葉はまだ熟さないが、地域史と国家論を別の研究ジャンルとして切り離していくのではなく、畿内西国の固有性をとらえながら、同地域を中世国家論に接続していくための、一つの仮説的概念になると考える。

次に、荘園と一国の中間的な地域的繋がりを分析するという研究の目的に照らして、播磨国の交通体系、中世成立期以来の所領配置の傾向などの空間的な把握、歴史的重層性について検討を行った。

その上で、研究の下位の目的である荘官層の動向について、特に荘園をこえた活動について注目し、行動の様態を明らかにし、その行動のありかたを先の空間的把握、歴史的重層性からも意味づけすることで、上位の目標である中間的な地域のまとまり、秩序の解明を目指した。

4. 研究成果

・播磨国加東郡の大部荘と明石郡の平野荘に乱入した悪党メンバーの重なりから、その出自と広域に散在する彼らがどのようにして関係を築いたかについて考察した。その結果、悪党メンバーの中核に荘園所務を担う代官や地頭の所務代官(地頭代)地頭代家人らがいること、大部荘悪党グループと平野荘悪党グループを結びつけていたのは、主人を同じくする地頭代家人であったこと、悪党の特色である広域のアクターの結集は、荘園所務を担う彼ら荘官層のつながりによって形成されている可能性があること、荘官層のつながりは、年貢の輸送や領主との連絡で彼らが訪れる、交通の結節点で形成されること、を明らかにした。

・以上の検討から、悪党行動の基盤となる中間的な地域的つながりが、荘官層の荘園所務の遂行によってつくられることが明らかとなったが、この点を踏まえると、悪党行為が14世紀で消滅する理由についても新たな説明が可能になる。従来悪党行為の消滅の理由については、悪党が体制化し荘園を「警固」するアクターとなる(実態としての悪党の消滅)、守護制度の整備とともに悪党対策が守護の安堵機能の中に吸収される(悪党の制度的消滅)などが提起されてきた。しかし、上記の見知に立てば、悪党の特徴である地域的なつながりは、15世紀に荘務のあり方が変化し、従来の荘官層が荘務から離れていくことで、その基盤を失ったという、新たな「実態としての悪党消滅」についての仮説が提示できる。

・その他の成果として、上記悪党事件に登場する播磨国下端の住人に注目し、中世の下端の地政学的意味についても考察した。下端は山間の小村で農業生産が豊かな地とはいえないにもかかわらず、平家領荘園となっていること(付近には清盛伝説を持つ小社も存在する)、暦応年間北の湯山街道沿いに勢力を展開した後醍醐方が下端に攻撃をかけたこと、村内に「時衆」が建立し

た 14 世紀の宝篋印塔が存在することなどから、この小村が南北交通の要所として位置づけられるとともに、その住人が交通を介して他の荘園に乱入する悪党集団と繋がっていたことが明らかになった。湯山街道から南下するルートについては、六甲山中を通るルートと明石川沿いを通るルート、伊川沿いを通るルートなど(これらの多くにも平家領の痕跡が認められる点も注目される)が想定されてきたが、それ以外の枝道に見えるルートにも、重要なものがあることが判明した。下端については、より通時的な考察の必要がある。

・加えて、暦応年間の湯山街道沿いの勢力の南下について、明石川ルートについて予備的に考察し、明石での合戦が川の西側の和坂で起こっていることに注目した。和坂の周辺にはかつて瀧があり、それを取り巻くように古代中世の遺跡が分布すること、その方に望むように明石津の古称と考えられる「林崎潮」(『播磨国風土記』)と関連する林崎神社があることから、中世の明石津の中心は、明石川河口の東にある現在の明石港とは反対側の明石川西側の瀧にあったのではないかという仮説を提示した。

・事例発掘的な成果となったが、悪党行動の基盤となった地域的繋がりが荘務のあり方と関連しており、荘務方式の変更が、その基盤を衰弱させたという仮説を提示できた。これの成果は、楠木武氏の「山間の海賊」論、榎原雅治氏の「宿の有徳人」論を悪党消滅の理由を考える枠組みで結合させるといふ、研究史を再文脈化するという点でも意味あるものとする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 市沢 哲	4. 巻 5
2. 論文標題 明石の歴史資料をよむ「島津忠兼軍忠状」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明石の歴史	6. 最初と最後の頁 85 - 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市沢 哲	4. 巻 4
2. 論文標題 播磨国明石郡平野荘の悪党	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明石の歴史	6. 最初と最後の頁 11 - 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------